院長

須藤 正人

青森県藤崎町出身。『弘前大学』の医学部を卒業後、整形外科と救急医療の現場を経て地域密着の病院で内科を担当する。その後は北海道の僻地の病院で副院長を務め、青森に戻って看取りの医療にも取り組んだ。勤め先の理解を得て、病院勤務を続けながら開業準備を進め、2015年4月に開業。

安心して暮らせる街づくりに寄与――
豊富な医療経験を活かして地域医療を支えていく

2015年4月、五所川原市に誕生した『すとうｍｒｉクリニック』。内科・整形外科などを標榜し、ＭＲＩやＣＴ、超音波などの最新機器を駆使しながら診療にあたる。さらに「在宅療養支援診療所」として往診にも取り組んでいく構えで、地域に根差した医療機関となることを目指す。本日は、タレントの黒田アーサー氏が須藤院長のもとを訪問し、お話を伺った。

――まずは、須藤院長が医療の道を志されたきっかけからお聞かせ下さい。

実は学生時代は、映画「トップガン」の影響を受けてパイロットになりたかったのです。しかし、高校2年生の時に視力が悪くなって受験資格を満たせなくなってしまいました。パイロット以外の道は考えていなかったので、「きっと不合格になるだろうから浪人しながら考えよう」（笑）と、地元で一番の難関『弘前大学』の医学部を受けたんです。すると、合格してしまったんです。運が良かったのでしょうね（笑）。

――いやいや、運だけで医学部は合格できませんよ。そこから医療の道を目指されるようになったのですね。

ええ。そして、研修では様々な科をローテーションで経験できる救急医療の病院を選びました。そちらでは3年弱で内科、整形外科、小児科、皮膚科などを回って幅広い知識と現場経験を蓄積したんです。研修が終わってからは整形外科で6年勤務し、整形外科と救急のスペシャリストを目指しました。その合間に内科のお手伝いもさせていただいたので、この時期に幅広い医療に携わることができたことは貴重な経験になりましたね。

――その後はまた別の病院に移られたのでしょうか。

はい。妻の祖母が暮らす金木町の病院が内科医を探しているという話を聞いて、そちらに移りました。整形外科と救急医療に携わってきた自分が、内科医になってみるのも面白いかな、と。それが、今から7～8年前のことです。

――そちらでは、何年ぐらいお勤めされたのでしょう。

3年ぐらいでしたね。私はもともと、周囲と同じように医局に入るのではなく違う道をと、無医村など医師が不足している場所で医療に携わりたいと考えていました。そこで、北海道にある乙部町という人口4千人ほどの小さな町へ行きまして、同町唯一の病院で副院長として勤務しました。医師は院長と私の2人だけで、24時間体制の当直が1日置きで続く状態。そこで治療できない場合は、患者さんに片道1時間半かけて函館の病院へ出向いていただくという環境でした。

――無医村に近い環境ですね。

ええ。経営状況も芳しくなく、以前は毎年2千万円ほどもの赤字を抱える病院でした。私が入ってからは1年目から黒字に転じることができ、その後、そちらを辞めるころには黒字経営で安定していましたね。

――それだけ、患者さんが増えたと？

はい。地元の方だけでなく、隣町からも患者さんが来て下さるようになったのです。そちらでは約2年間勤務しましたが、地域の方々と交流を図る機会にも恵まれましたね。子どもの学校行事に参加して皆さんと顔見知りになったり、漁師さんがイカを病院まで持ってきて下さったりと、地域の皆さんとのふれあいは楽しかったですよ。

――地域密着の医師という印象です。

その後は青森に戻り、つがる市内にある病院に移りました。そこは療養と看取りのための病院で老健施設も備えており、今度は看取りの医療を極めたいと考えるようになりましたね。2年半ほど勤務し、まだ30代でしたが院長も務めさせていただき、地域の病院と連携を図りながら改革を進めていきました。ところが、院内体制の変化に伴って退職することを決め、開業することにしたのです。幸い、勤めていた病院の理解を得ることができ、勤めを続けながら開業準備を進めることができ、この4月1日に『すとうｍｒｉクリニック』を開業する運びになったんです。

――豊富な経験を積んでこられた院長にとっての集大成といったところですね。

ええ。これまで、いつも多くの方に支えられ、その中で貴重な経験を積ませていただきました。以前、勤務していた病院では総合診療科に所属して主に内科と整形外科、小児科を診ていましたが、当地には小児科がすでにありますので、当クリニックは内科・整形外科・リハビリテーション科の診療をメインに提供していきたいと思っています。そして、クリニック名にある通り、ＭＲＩを導入している点が特徴です。この近くに地域の中核病院がありますが、紹介状を持つ患者さんしか受診できないんですね。しかし、当地は脳卒中を患う方が多い傾向にありまして、ＭＲＩを導入すればより適切な医療サービスを提供できると考えました。もの忘れ外来や頭痛外来など、頭の検査をする時にもＭＲＩが役立ちます。

――開業医でＭＲＩを導入されている病院はそう多くないでしょうから、地域の皆さんも期待されているでしょう。今後については？

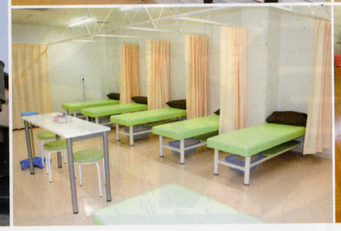
「在宅療養支援診療所」として、往診にも前向きに取り組んでいく考えです。それと同時に、患者さんの生活の質をより向上させたいという思いを持つ医療施設や介護事業所と連携を図って、安心して住める街づくりに寄与していきたいですね。

――本日は、ありがとうございました。

在宅療養支援への挑戦

▼さらに進む高齢化に伴い、『厚生労働省』は終末期の療養場所として病院などの医療機関ではなく在宅や介護施設での看取りを増やしていく方針を打ち出した。しかし僻地医療や看取りの医療に深くかかわってきた須藤院長はその心中を語る。「都会ならそれも可能かもしれませんが、地方ではとても大変なことなんです。敢えてそこに取り組み、実例として提示することで、その大変さを知ってもらいたいという思いもある」と。

▼院長は勤務医時代に県内でも数人しか持っていない「認知症サポート医」の資格を取得。これは『国立研究開発法人 国立長寿医療研究センター』が行う認知症サポート医養成研修を修了した医師を指す。認知症の人の診察に習熟し、かかりつけ医への助言などの支援を行うと共に、専門医療機関や地域包括支援センターとの連携の推進役を担う。今後、「在宅療養支援診療所」としての取り組みを行う中で、この資格が多いに役立つことだろう。



内科・整形外科・在宅療養支援診療所

すとうmriクリニック

青森県五所川原市姥萢船橋 246-1

TEL 0173-35-6060

ゲスト●黒田 アーサー

「クリニックでの診療に加えて、今後は往診にも力を入れていきたいとおっしゃる須藤院長。お一人ではとても手が足りないのではと心配ですが、院長は『頭の中で時間配分はできている』とのこと。きっと多くの方が、院長の往診に期待されているでしょう。どうか健康にご留意なさって、地域の皆さんに寄り添い続けて下さい」